

続縄文時代前葉から中葉の集落と住まい

北海道大学埋蔵文化財調査室 守屋豊人

はじめに

本報告の目的は、続縄文時代前葉と中葉に位置づけられる集落址を取り上げ、北海道における集落址の特色を示すことである。北海道における集落址の特色を遺構（竪穴住居址や土壇や屋外炉址）の組み合わせ及び、竪穴住居址の重複状況から概観すると、道南部、道央部、道東部に区分される。ここでは近年発掘調査され、報告された遺跡を取り上げ、各地域の集落に関する特色を概観する。なお、今回の報告では続縄文時代の時期区分として、鈴木信によってまとめられた続縄文土器の土器変遷観を参照した（鈴木2008）。

1. 道南部 函館市茂別遺跡（北海道埋蔵文化財センター1998）

標高約40mの海岸に面した段丘に位置する茂別遺跡は、発掘調査によって、縄文時代早期～晩期、続縄文時代前葉～中葉の資料が発見された。続縄文時代の遺構・遺物はⅢa層と呼称された地層に存在した。続縄文時代の遺構には竪穴住居址6基、土壇墓38基、土坑18基、石囲い炉2基、屋外炉址と考えられる焼土址54基があった。重複することがなかった各遺構は、結果的に遺構ごとに分布が偏って発見されたと現状では考えられる（図1）。竪穴住居址は海岸に近い場所に作られ、石囲い炉や焼土址は竪穴住居に近接した位置に存在した。土壇墓や土坑は竪穴住居址と離れた陸地側に存在した。竪穴住居址6基の規模、平面形態は、直径約2.6m～11mまでの円形（すべて）であった。竪穴内の中央には炉址（焼土址および石囲い炉）が存在し、各々の住居の壁高が平均10cmと浅かった。

茂別遺跡では竪穴住居址や土壇墓や焼土址が重複することなく、結果的に各遺構の分布が偏った状態で集落址が形成され、続縄文文化中葉に集落が廃絶されたようである。

2. 道央部 札幌市 K39遺跡人文・社会科学総合教育研究棟地点（北海道大学2004）

北海道大学構内に存在する K39遺跡人文・社会科学総合教育研究棟地点では、河川近くの微高地に立地した集落址が、続縄文時代前葉（14a層）、続縄文時代中葉（13b層、12c層、12a層）の合計4つの地層から発見され、間層を挟みながら重複していた（図2）。14a層では竪穴住居址3基、土坑7基、屋外炉址10基、焼土粒集中20箇所、炭化物集中49箇所が発見された。竪穴住居址はすべての平面形態が円形で、中央に炉址がみられた。12c層では竪穴住居址7基、土坑27基、屋外炉址10基、焼土粒集中7箇所、炭化物集中15箇所が発見された。竪穴住居址すべての平面形態は円形の竪穴に舌部とよばれる張り出しがみられ、竪穴の中央に炉址が存在した。12c層の竪穴住居址の内、第1号竪穴住居址は第10号竪穴住居址（13b層）の真上に掘り込まれ、両者は上下に重複していた。同様なことは12c層の第11号竪穴住居址と13b層の第12号竪穴住居址にもみられた。

この地点では、続縄文時代前葉と中葉の集落址が河川近くの微高地で若干の位置を代えながら重複すること、また、続縄文時代中葉以降、竪穴住居址が上下に重複して構築される特徴がある。

3. 道東部 北見市常呂川河口遺跡（北見市教育委員会2007）

この遺跡は常呂川によって形成された海岸近くの微高地（標高約4m）に位置し、縄文時代、続縄文時代、擦文時代（オホーツク文化を含む）の集落址であった。各時代の遺構、特に竪穴住居址（250基以上）は微高地上で著しく重複した状況であった（図3）。続縄文時代前葉から中葉の遺構には、竪穴住居址、土壇墓、埋甕、集石、屋外炉址がみられた。続縄文時代中葉に位置づけられる竪穴住居址3基（109号竪穴、109a号竪穴、109b号竪穴）は同じ場所で重複していた事例の一つである（図3）。

道東部の遺跡は、遺構の組み合わせだけでなく、竪穴住居址の重複や通時代的な竪穴住居址の重複

に特徴がみられる。

おわりに

道南部、道央部、道東部の遺跡を取り上げ、北海道における縄文時代の集落の特色が遺構（特に
竪穴住居址）の重複状態にみられ、3つに区分されることを示した。数少ない遺跡をあつかって特色
を述べたため、課題が多く存在するが、一つの傾向は示したと考える。

引用文献

北見市教育委員会 2007 『常呂川河口遺跡（7）』

鈴木 信 2008 「縄文文化の鉄器・石器・渡海交易の関係について」『縄文文化とは何か』2008年度北海道考古
学会研究大会資料

北海道大学 2004 『K39遺跡人文・社会科学総合教育研究棟地点発掘調査報告書』

北海道埋蔵文化財センター 1998 『上磯町 茂別遺跡』

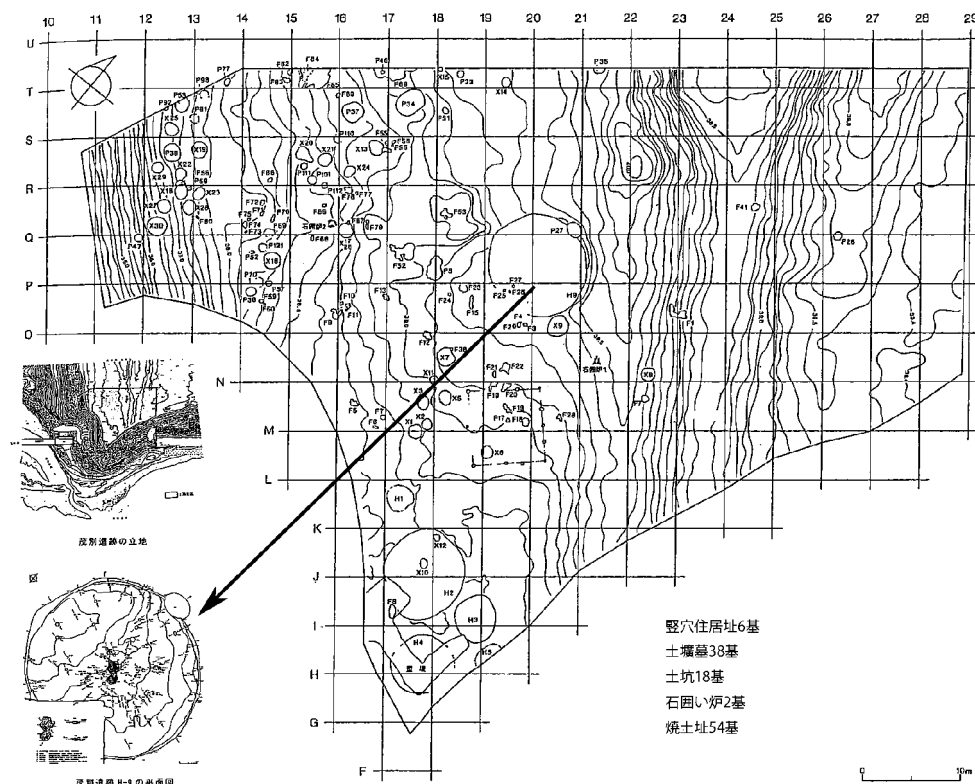


図1 茂別遺跡の遺構分布

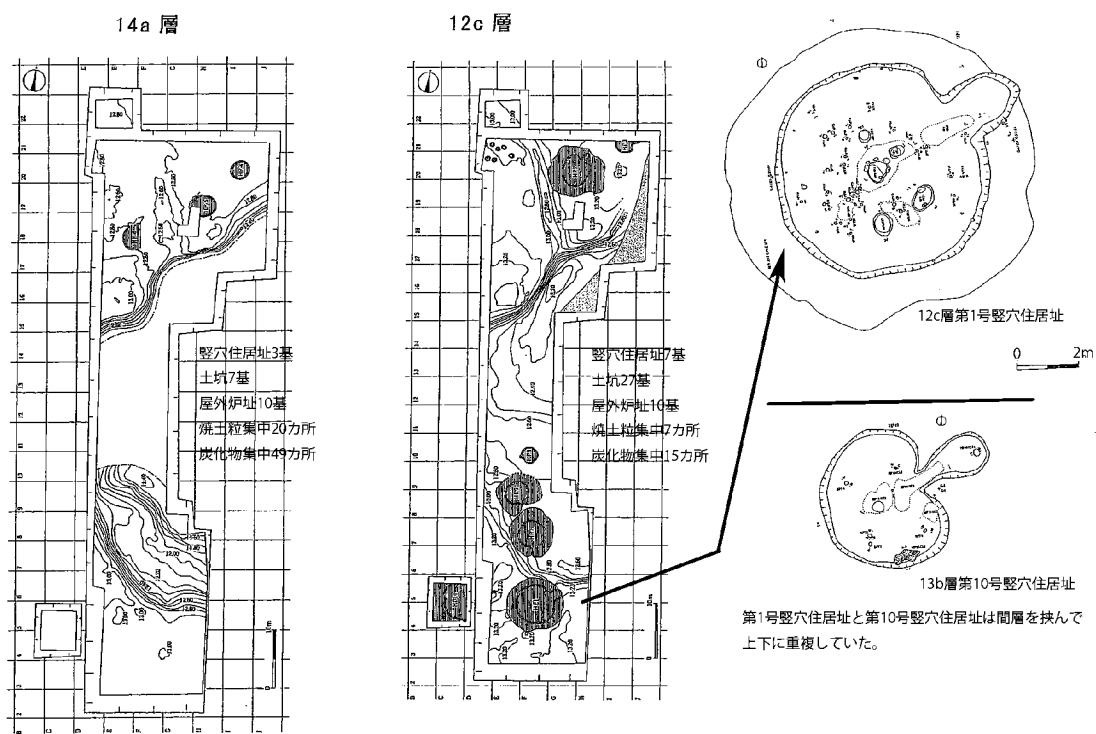


図2 K39 遺跡人文・社会科学総合教育研究棟地点の遺構分布

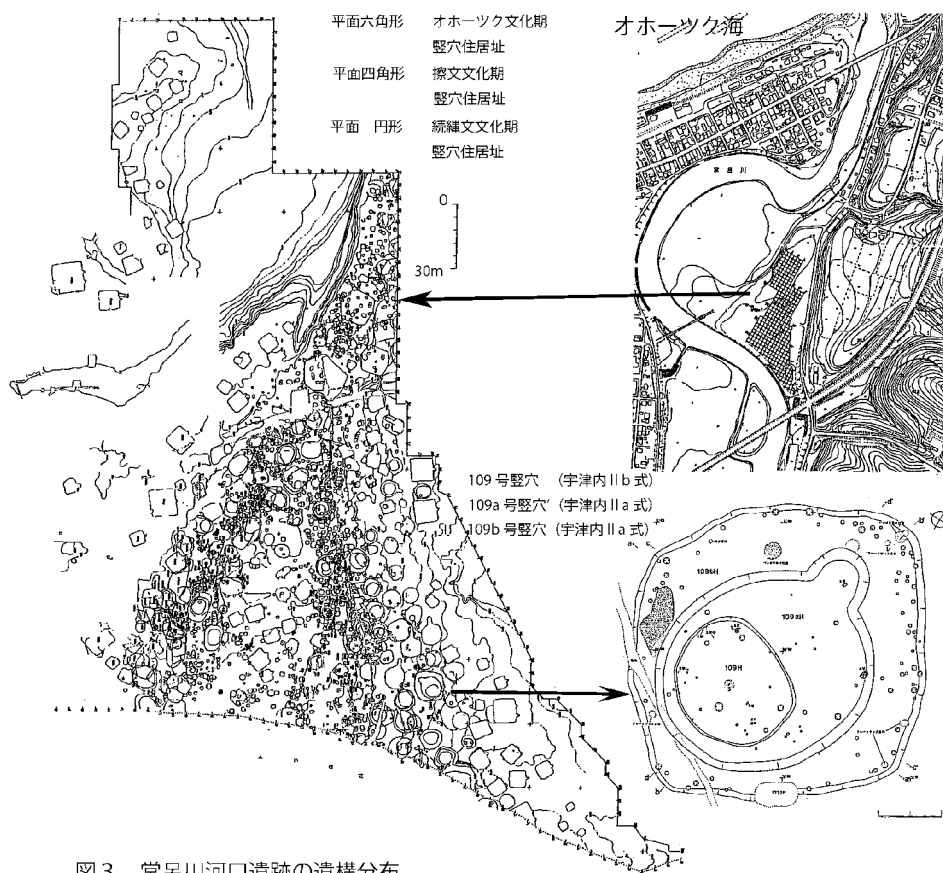


図3 常呂川河口遺跡の遺構分布